

水辺活動が大学生の自然観に与える影響

—日本の自然観に着目して—

東 昂平 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)
指導教員 中野 友博

キーワード 水辺活動 大学生 日本の自然観

1. 緒言

個人が、環境を大切に作る姿勢を養い、環境に配慮した生活や責任ある行動をとることが大切である。「人と自然との関係」について理解を深め、適切な行動のとれる姿勢や技能を高めることは野外教育の目的の一つとなっている。

自然観は人の中にある。東原²⁾は、自然観とは、自然のとらえ方、自然に対する認識の仕方をいうと述べている。金下¹⁾は、日本の自然観の根源は「おのずから」と言っている。「おのずから」を「みずから」に生きていることを「自然体」と言っている。自然体という生き方は日本の自然観を通して私たちが理想とする生き方、どこまでも自然のあり方に沿った、自然と一体化した生き方である。自然に対する認識は、自然に対してどのような感情を持ち、どのような態度を持っているかをいう。また、その態度は感情の要素から推測できる。

水辺活動が個人の自然観へ与える影響を日本の自然観に着目し、明らかにすることは今後の環境教育の参考資料になると考えられる。

そこで本研究は、水辺活動が参加した大学生の自然観に与える影響を日本の自然観に着目して明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

調査対象者は、2013年9月4日から9月10日、9月13日に、びわこ成蹊スポーツ大学艇庫及び、周辺の琵琶湖を用いて行われたびわこ成蹊スポーツ大学水辺実習 C コース・D コースに参加した大学生 130 名である。この被験者に対し、自然観を測るため、1つの刺激語「自然」を採用した SD 法による感情の態度テストと「自然」「水」「環境」「空」を刺激語とした自由連想法の調査を行った。また、調査は実習直前及び実習直後に実施した。

3. 結果及び考察

1) 感情の態度の変化

感情の態度得点は、水辺活動の前後で、刺激語「自然」に対し、形容詞「強い」「動いている」「静かな」「意外な」「怖い」「興味のある」がポジティブに変化していた。変化した要因として雨が降ってきたり、山からの強い風により波が激しくなったという活動中の天候の変化が影響していると考えられる。自然の力を感じ強い、こわいという感情は自然の壮大さに触れたことによって感じるこの出来た気持ちであると考えられる。

2) 自由連想法の変化

「自然」「水」「環境」「空」の全ての刺激語において総連想語数、総連想語種類数は水辺活動後に増加した。これは、非日常的な体験をし、自然に対し「楽しい」「予知できない」「こわい」などが連想された。

表 1 総連想語数、総連想語種類数の変化

(語数)		
	pre(種類数)	post(種類数)
自然	670(159)	822(186)
水	528(107)	571(145)
環境	332(127)	392(152)
空	570(116)	588(131)

刺激語「自然」に対して「空、変わる、大きい、風、怖い」が新たに連想された。これは、水辺活動を行ったことで、自然の変化や偉大さを感じたと考えられる。

連想された形容詞の変化をみると、「楽しい」「強い」「予知できない」「逆らえない」「強い」「怖い」という言葉の連想語が増加した。形容詞が増えた要因として、自然現象である、天気に関係していると考えられる。

3) 水辺活動種目における比較

カヤックとボードセーリングそれぞれの調査時期において連想語、連想語種類を比較した。カヤック、ボードセーリングともに、刺激語「自然」において「こわい」「大きい」が post 時に連想されている。カヤックも一見安全に見えるが沈をした時にはすごくこわいであろう。ボードセーリングもいきなりの突風が吹くと操作できなくなり、水の中に放り出されてしまう。どちらにしても、足が付かないという状況から連想されたと考えられる。

4. まとめ

本研究の結果、大学生の日本の自然観は、水辺活動の影響により自然に対して偉大や畏敬の念や恐怖を感じ、ポジティブに変化することがわかった。自然の厳しさ激しさも自らの体を持って体験したことで、普段の生活では決して考えない自然の大切さや尊さを感じたと考えられる。

水辺実習を体験することでこわい、こわい、必要、大切などの自然を敬う言葉が多く連想された。また実習後のレポートからは、自然とうまく付き合っていく事は大切であるや、自然に触れ生活に活かしていくや、自然に適応しなければならないという言葉が多く書かれており自然と一体であるという日本の自然観を思わせる言葉があった。このことから水辺活動は大学生の日本の自然観にポジティブな影響を与えると考えられる。

【参考・引用文献】

1) 金下玲子・木内功・後藤裕己・田島由紀子・新田章伸・野田泰栄・菅井啓之 (2013): 継承したい日本の自然観 日本の自然観実践的研究会 1-15

2) 東原昌郎 (1984): 自然観と野外活動に関する一考察, 東京学芸大学紀要, 36: 175~182